

見えてきた「15 年」

いよいよ 2015 年が終わります。一度書いた話ですが、中国史上もっとも有名な「始皇帝」が支配した秦（しん）という国は、中国統一から滅亡まで 15 年間だった国家です。（紀元前 221 年～紀元前 206 年）度量衡の統一、焚書坑儒、兵馬俑建設など燦然たる風景を示す国家ですら 15 年間で消えていったという事実は改めて栄枯盛衰の理（ことわり）を示しているようです。一般的には未来を示す表現として 5 年、10 年という言葉を使いますが、15 年間は別の深い意味で考えてみるべき時間の単位でもあります。例えば、15 歳と 30 歳の違いや 30 歳と 45 歳の違い、あるいは 45 歳と 60 歳の違いに思いをはせれば、その圧倒的な相違に気付くかもしれません。

15 年間で撒かれた「時代変化の種子」

現代社会も 2000 年からの 15 年間を見てみると、隔世の感があります。2001 年の米国同時多発テロの発生以来世界は国家とテロ集団の泥沼の中にあります。2000 年に 61 億人だった世界人口は 2015 年には 73 億人を突破し、貧困や格差は広がり、2050 年の 95 億人（予測値）へ向かって爆発を続けています。順調だった世界経済を大きく傷つけたリーマン・ショックは 2008 年のことでした。9 月 27 日に終値は 12214 円だった日経平均の終値が、翌日には一気に 6000 円台まで下落したのを覚えている方もいるはずです。スマホ時代の草分けである iPhone の発売は 2007 年の 6 月のことであり、続くタブレット新時代の iPad は 2010 年の発売は 4 月でした。こうやって 15 年間で俯瞰すると、その時間的経過とともに起こる価値観の変化がよくわかります。

2015 年までの 15 年間は、いわば時代変化の種子が撒かれ発芽の時代でありました。先日のロシア爆撃機へのトルコの攻撃を見て、新しい時代へのラインナップがほぼ出揃ったような気分になりました。

これからの 15 年間と企業組織

TPP を始めとする世界の大きな流れと日本社会はこれまで以上に密接なつ

なかりをもって変化します。島国であったがために許されていたガラパゴス的な価値観や感覚は次の時代には通用しないかもしれません。いわゆる本質的な問いかけと取り組みが求められる時代が始まっています。

何よりも「生産性向上の仕組」が重要です。OECD 加盟 34 カ国の中で、一人当たり GDP17 位、労働生産性第 22 位、時間当たり生産性 20 位という現実を知れば、それぞれの組織でどれほどの真剣な取り組みが必要かわかるはずです。（順位は日本生産性本部の資料による）2020 年には車両に関して自動運転の実用化が始まり、様々な製造現場ではロボット化が急速に進んでいます。先端技術と労働の現場は完全に結びつき、今まで考えられなかったような風景がいたるところで見られるようになりました。

組織内で全社一丸の「意識改革」ができるかどうか、最先端技術への「設備投資」ができるかどうか、「時代に合った人材」を育成できるかどうか・・・、こうした当たり前の事を当たり前にできる組織しか、これからの 15 年間に凌いでいけないのだろうと考えます。

組織活性化活動の開始

今年一年「人の差が組織の差」というテーマで、様々な企業支援活動を行ってきました。5S 活動を入り口にして利益改善と人材育成が大きく進んだ組織があります。組織の成長は、鶏が先か卵が先か、という永遠の問いかけの中にあります。利益が出たから良い人材が集まったのか、人が育ったから利益が出るのか。結果を変えたければ行動を変える必要があります。行動を変えるためには意識を変えなければなりません。意識を変えるためには適切な情報が必要です。いずれにしても経営トップの意識変化がなければ形にはならないことです。ぜひどの企業も組織活性化活動に意欲的に取り組んで頂ければと思います。

本年もお世話になりました。来年もどうぞよろしくお願いいたします。